

「2024年度バルセロナ大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学総合人間学部3年 四方 春輝

① 学習成果

私は、もともと今年の9月からバルセロナ自治大学への交換留学を予定していたので、今回のプログラムによる留学意欲の変化は特になく、依然として高いまま。しかし、スペイン語や英語の学習意欲は非常に高まった。特に印象的だったのは、プログラム中に経験した食中毒による病院受診だ。現地の病院では英語があまり通じず、塚原先生のサポートなしには診察を受けることが困難だった。この経験から、スペインでの生活には日常会話レベルのスペイン語が不可欠であることを痛感した。また、英語でのコミュニケーション能力もまだまだ未熟だと再認識させられた。特に時差や、食あたりなどで、体調が万全でない中でコミュニケーションが十分にできなかった。集中せずとも、自然に英語を話せるようになる必要があるように感じた。交換留学までは、多国籍シェアハウスでの生活や、E3科目の受講を通じて改善していきたい。

国際理解への意欲も一層高まった。留学生との意見交換授業を通して、世界情勢に対する自身の知識不足や、表面的な理解に気づかされた。今後は、多角的な視点から世界情勢を捉え、自身の意見をしっかりと持てるようになりたいと考える。同時に、自国の日本について説明しようとした際、言葉に詰まる場面が多々あった。国際的な視点を持つと同時に、日本の文化や歴史、社会についても深く理解する必要性を痛感した。

② 海外での経験

バルセロナの街並み、特にアントニ・ガウディの建築群は、以前から強い関心を持っており、実際に目にすることでその独創性と美しさに感銘を受けた。しかし、美しい建築物が立ち並ぶ一方で、道路や地下鉄などの公共インフラは日本と比較すると手が込んでいない印象を受け、そのギャップに意外性を感じた。スーパーブロックのような公共空間にも興味があったが、街中で多くのホームレスや物乞いの人を見かけるなど、日本とは異なる欧米社会の個人主義的な側面を垣間見た。

食文化体験を通して、日本食への理解も深まった。現地の食事は、塩味が強く単調な味付けのものが多く、日本食のような多様な調味料や出汁による複雑な味わいの料理は少ないのではないかと感じた。この違いは、欧米の二元論的な文化に根ざしているのかもしれないと個人的に考えた。また、胃の不調の影響もあるだろうが、硬水が予想以上に体に合わなかったことも驚きであった。

③ プログラム内容

食中毒によりプログラムの約3分の1を欠席してしまったため、語学の授業や共同発表の準備に十分に参加できなかったことは残念であった。参加できたプログラムの中で特に印象に残っているものは、バルセロナ市内を巡るガイドツアーと、バルセロナ大学の現役留学生と共に参加した授業である。どちらも英語で行われたため、自身の英語力不足を痛感する良い機会となった。ガイドツアーでは、バルセロナの美しい街並みを実際に歩きながら、その歴史や文化に関する詳細な解説を聞くことができ、とても勉強になった。留学生との授業では、自身の交換留学を前に、現地の授業の雰囲気を肌で感じる事ができた。積極的に発言し、自分の意見を即座に英語で表現できるようになる必要性を強く感じた。

④ 進路への影響について

バルセロナでの交換留学がより一層楽しみになったことは言うまでもない。今回のプログラムを終えて、まだまだ魅力が詰まっていると感じた。また、体調を崩してしまったとはいえ、未知の世界に対する興味関心もさらに高まっている。可能な限り多くの場所を訪れ、様々な経験を積みたい。進路については未定ではあるが、卒業後もそうしたことをする時間を作れるような働き方をしたいと思うようになった。